

# 韓国語大邱方言話者の発話にみられる 日本語アクセント特徴

鄭 樹 洙\*

(e-mail : jsoomi@yahoo.co.kr)

---

## 目 次

---

1. はじめに	4. 結果及び考察
2. 先行研究	4.1 アクセント型別正答率
2.1 日本語アクセント	4.2 発話パターン
2.2 大邱方言のアクセント	4.3 拍数別及びアクセント型別分析
2.3 学習者を対象とした研究	4.3.1 3拍語
3. 研究方法	4.3.2 4拍語
3.1 被験者	4.4 音節構造別の分析
3.2 調査語	4.4.1 3拍語
3.3 実験方法	4.4.2 4拍語
3.4 分析方法	5. まとめと今後の課題

---

## 1. はじめに

学習者の母語によって日本語アクセントの発話に一定の傾向があることが指摘されている(李・鮎沢・西沼1995a、1995b、大西1991、李香蘭1999、助川1999)。さらに、同じ母語でも方言の違いがある場合、アクセントの生成においてそれぞれ特異な型があることも報告されている(鮎沢他1995、戸田2001、鄭2001)。学習者の日本語アクセントを教えるためには学習者の日本語アクセントの実態を調べ、発話パターンを明らかにし、教育に取り入れる必要があると思われる。

本稿では韓国人学習者の日本語アクセントの実態を分析し、語の音節構造がアクセン

---

\* HANBAT大学講師、日本語音声学、日本語教育 専攻

ト生成にどのように影響するかを明らかにすることに目的がある。音節を基本単位として発話している韓国人学習者が拍を基本単位とする日本語を発話する際の特徴を明らかにしたい。その出発点として、まず日本語と類似した韻律的特徴を持つ学習者がどのように日本語アクセントを生成するかを調べるため、大邱方言話者を対象とした。なお、本稿では「韓国語」及び「韓国語話者」は大邱方言及び大邱方言話者を、「日本語」は東京方言を指すことにする。

## 2. 先行研究

### 2.1 日本語アクセント

アクセントとは語中のある拍を強めたり高めたりしてできる拍相互の強弱関係あるいは高低関係のことである。日本語は拍間の高低の違いに意味がある場合、つまり高低アクセントを持つ言語である。日本語のアクセントとは、伝統的な社会的な習慣として一語一語について決まっていて、意味の区別や語の切れ目を明らかにするのに役立つものである（坂井1992、上野1990）。音調の下がり目がある拍にはアクセント核があるという。日本語のアクセント型の分類をみると、ある単語や文節の中に下がり目があるかないか、あるならどの拍にあるかを指摘することで明確に示すことができる。

日本語では長さの単位として金田一春彦による「拍」、またはモーラという用語が使われ、仮名文字をすべて拍の単位と見る。長音の後の部分、二重母音の各母音、撥音、促音、無声化された母音を持つ拍など、すべてが1つの単位とする（杉藤1990）。一方、音節とは母音を中心とする音もまとまりで、例えば、「東京」「関西」は母音を二つしか含んでいないから2音節で、仮名は4つ含んでいるから4拍（または4モーラ）ということになる（窪園1999）。一般に音節はその重さによって自立拍1つからなる軽音節（こ、く、り）、自立拍+特殊拍の2拍からなる重音節（かん、がっ、そう、けい）、そして自立拍+特殊拍+特殊拍の3拍からなる超重音節（ワイン、すーっと）の3種に分類される（窪園1995、1999）。特殊拍とは撥音、促音、長音、二重母音の「い」で、アクセント核を担えないため、下がり目が起こりにくく、かつ自立性がない拍を指す。その他は自立拍という。伝統的な分析では音節とモーラを同義に用いたが（窪園1998）、本稿では拍は語の長さを数える単位とし、音節は母音を中心とするまとまりとして両者を区別する。

### 2.2 大邱方言のアクセント

韓国語諸方言のアクセント体型を共時的な観点から分類すると、アクセントが弁別的である方言とそうでない方言に大別される。弁別的な方言の一つに大邱方言が属し（服部

1968, 関1990)、ピッチが非弁別的な方言の代表として標準語であるソウル方言がある(福井2001, 早田1999)。アクセントが各音節におかれるが(이호영1993)、各音節は高(●)か低(○)の二つの弁別的素性の対立によって弁別される(大江1976、管野1972)。大邱方言は音節数の増加に伴って、ピッチパターンによる対立の型の種類が増えるいわゆる多型アクセント(福井2001)、またはN型アクセント(大江1976)である。このように大邱方言には高さによって語彙の意味が区別される(鄭然燾1975、関1989b、福井2001)。例えば、大邱方言の1音節名詞には4種類のアクセント型があり、その中で最大3種類のアクセント型が語の意味区別に関与している。例えば、「말」[ma:l] (言葉)は、音節内の声の上昇をその特徴とし、「말」[mal] (馬)や「말」[mal] (升)に比べてその持続時間が長いことから、1音節2モーラと数えられる(関1989a、1990)。この点は東京方言と大きく異なる特徴である。服部(1968)によると、大邱方言のモーラと音節は日本語のそれらと似ているが、大邱方言には特殊モーラがないため、その点では相違がある。そして、アクセント核の位置は、単語の第1モーラか、2番目、そして後ろから2番目のモーラに限られている(早田1999、大江1976)。大邱方言のアクセントは以下のようにまとめることができる。

表1 大邱方言のアクセントの簡略記号 (大江1976、孫2006)

音節 記号	A	B	C	D	E
1音節	H:(H)	H(H)	H(L)		
2音節	H:H	HH	HL	LHH	
3音節	H:HL	HHL	HLL	LHL	LLH
4音節	H:HLL (なし)	HHLL	HLLL (なし)	LHLL (なし)	LLHL

「H」は高、「L」は低、「:」は長音を、「なし」は該当語がないことを示す。

### 2.3 学習者を対象とした日本語アクセントの研究

東川・佐藤(1994)では韓国在中の韓国人日本語学習者57名を対象に、/CV-CV/、/CV-R (長音) /、/CV-N (撥音) /のモーラ構造を持つ3種類の無意味語合成音のアクセント知覚実験を行った。その結果、/CV-CV/のような自立モーラ連続の2モーラ2音節語のアクセント知覚は/CV-R/、/CV-N/のような後半に特殊拍を含む2モーラ1音節語より困難であることがわかった。/CV-CV/、/CV-R/、/CV-N/のそれぞれについて、慶尚道方言話者と慶尚道以外の者との間の正答数に関しては/CV-CV/、/CV-N/については有意差は認められなかったが、/CV-R/については慶尚道方言話者の正答が有意に高かった。それは相対ピッチの習得が、音節言語である韓国語の話者にとって難しくなっているためと述べている。

李・鮎沢・西沼 (1995b) は新羅大学日本語科の1・2・3年生30名を対象に頭高型、中高型、平板型アクセントの3拍から5拍の単純語または複合語で、特殊拍を含まない24語のアクセントの聞き取りの調査を行った。その結果、3拍語が一番正答率が高く、4拍5拍と拍数が多くなるにつれて正答率が落ちた。アクセント型では、語頭から2拍目に核がある型が正答率が高いが、語頭から3拍目にアクセント核がある型は正答率が下がる。語頭でも語頭から2拍目にアクセント核がある2型が多いが、これは釜山地方の韓国語では前の方が高い丘型(ただし、頭高型ではない)アクセントが使われるので、その影響によるものであると述べている。そして、アクセント要因は学習者の言語別に特有なパターンがあり、母語別に得意/不得意のアクセント型があると述べられた。

李・鮎沢・西沼 (1997) ではソウルの日本語学習者で、2年生38名、3年生30名を対象に3、4、5拍語の聞き取りのテストを行った。その結果、全体の正答率は49%で、学年別の有意差は見られなかった。アクセントの聞き取り能力と日本語学習歴とは関係がないということが明らかになった。そして、3、4、5拍語とも平板型の正答率が最も高く、成績群別の正答率の差は頭高型の正答率にもっとも顕著に現れると報告している。

李香蘭 (1999) は韓国全羅道の初級学習者10名と中級学習者10名を対象に、日本語アクセントの知覚率とその学習効果を2拍、3拍、4拍の語で、知っている単語と知らない単語を含む調査語で調べた。その結果、-2型の生起率が非常に高かった。学習効果の面では、知っている単語のうち、使用頻度の高い語ほど学習効果は低かった。そして、アクセントの知覚率は拍数が短いほど高いが、学習効果は拍数が長いほど高かった。

このようにこれまでの研究ではモーラを分析の対象とした例が多い。しかし、韓国語は音節言語で、学習者の母語の音節がアクセント付与に何らかの形で関わっている可能性があり、学習者の母語と同様に音節を単位とした分析が母語の干渉をより明確に説明できると思われる。

本稿ではこれらの先行研究を踏まえ、学習者の日本語アクセントの発話における日本語と日本語アクセントの関係を、特に大邱方言話者のアクセント調査を通して行う。

### 3. 研究方法

#### 3.1 被験者

本稿では韓国人日本語学習者で特に大邱母語話者10名を対象にして発話テストを行った。大邱方言話者をその対象としたのは、大邱方言はアクセントによって意味の区別がある示峻的アクセントを持つ方言(閔1989b、1990)であるため、それが日本語のアクセントの発話に何らかの影響を与えるだろうと思われたためである。被験者は日本で留学した学

習者で、全員大邱出身で大邱方言話者である。調査の都合で学習歴と日本での滞在期間には個人差がある<sup>1)</sup>。

表2 被験者の学習歴と日本での滞在期間

被験者	日本語学習歴(年)	滞在期間 (年)
A	10	6
B	3	1
C	1	1
D	7	4
E	10	5
F	6	1.8
G	5.6	5.6
H	4	0.6
I	1.6	1.7
J	7	4
平均	5.5	3

### 3.2 調査語<sup>2)</sup>

調査語は漢字2字の漢字語を中心として選んだ。3拍語が68語で、内訳をみると、頭高型が26語、中高型が8語、平板型が34語である。4拍語は65語で、頭高型が8語、中高型が7語、平板型が50語である。

表3 調査語

アクセント型	3拍語 (合計 68語)	4拍語 (合計 65語)
頭高型	操作、電池、神戸 <sup>3)</sup> など 計26	韓国、音楽、海外、など 計8
中高型	日本、自由、試験など 計8	制限、少数、学問など 計7
平板型	参加、消費、電話、政治など計34	健康、開発、連絡、会見など計50

### 3.3 実験方法

発話実験ではリストの語に振り仮名を添えてカードに印刷し、ランダムに並べ替えたものを

- 1) 李・鮎沢・西沼 (1997) で、ソウル駐在の大学で聞き取りの実験を行った結果、学年別に正答率の有意差はなく、アクセントの聞き取り能力と日本語学習歴とは関係がないと述べている。その他に李香蘭 (1999)、関・鄭 (1996)、鄭 (2001) でも同様のことを述べている。
- 2) 本稿で扱う調査語は複合語アクセントの傾向を調べるためにその先行調査として行った実験で用いた単語で、複合語アクセント実験の複合語の構成要素となった前部要素と後部要素の語であるため、語例や語数、そして分析に際しては音節構造別にはばらつきがある。今後は語数にはばらつきがないようにする。複合語アクセント及び単純語と複合語に関する結果は別項に譲る。
- 3) 固有名詞がいくつか入っているが、実験の結果では他の語と同様の結果が見られたため、分析から除外しなかった。むしろ、固有名詞の結果が分析の上では最も著しい傾向を見せた。

被験者に2回ずつ読み上げてもらい4)、一人当り133語の録音資料を得た。被験者にはアクセントの実験についての情報は知らせなかった。なお、実験は個別に行った。

### 3.4 分析方法

被験者の読み上げた録音資料を1名<sup>5)</sup>の日本人話者、40代(女)の東京出身の現職の日本語教師に聞かせ、アクセント核の位置をつけてもらった。学習者の日本語アクセントの場合、上昇のパターンが日本語のそれとは異なり、低低(○○)になったり、高高(●●)になる場合があるが、本稿ではアクセントの下降のみを分析の対象とすることにする。本稿で扱う記号について述べておこう。アクセント核は「´」で示す。アクセント核が無い場合、つまり平板型は「~」で示す。「\*」とは日本語のアクセント型と異なるアクセント型、つまり誤用アクセントである。Cは子音、Vは母音、Xは特殊拍を示す。特殊拍には撥音、促音、長音、そして二重母音を含める。「H、L」は高低を指す場合でも使われるが、本稿では音節を指す。以下で、Hは重音節、Lは軽音節を示す。○は低、●は高を指す。日本語のアクセント型は頭高型、中高型、平板型と呼び、学習者のアクセント型は例えば-3型、-2型、0型などと区別した。学習者の発話の結果を生成パターンと呼び、アクセント核の位置を語末から数えて、0型は平板型(無核)、-2型は語末から2拍目にアクセント核があるパターン、-3型は語末から3拍目にアクセント核があるパターン、-4型は語末から4拍目にあるパターン<sup>6)</sup>である。

## 4. 結果及び考察

アクセント生成の結果、日本語のアクセント型に当てはまる場合を正答とし、下降の位置が異なる場合は誤答<sup>7)</sup>とみなす。まず、日本語のアクセント型に合ってるかどうかを調べた結果を示す。

### 4.1 アクセント型別正答率

- 
- 4) 単語を連続2回で、かつなじみのある語を読んだためか、同じ語の発話でパターンとの差は見られなかった。2回の発話を1回とカウントし、調査語133(語)×10(人)=1330(合計)になる。
  - 5) アクセント核の位置の判断において、本稿では1人の判断結果を用いたが、2人以上の判断結果がよいと思われるが、今後の課題とする。
  - 6) アクセント核の位置を語頭から数える場合、例えば、1型、2型(明解日本語アクセント辞典)などもあるが、大邱方言話者の場合、アクセント核は語末にある場合が多いので、語末から数えることにする。
  - 7) アクセントの上昇の位置も含めると正答率はより低くなるが、ここでは下降の位置に限る。

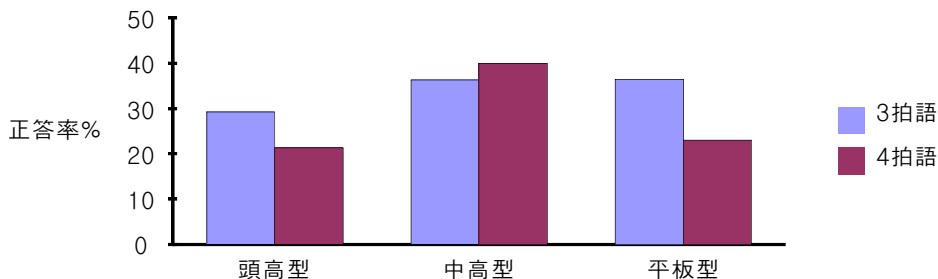


図1 3拍語と4拍語のアクセント型別正答率

図1には大邱方言話者の正答率を3拍語と4拍語の各アクセント型別に示した。例えば、3拍の場合、頭高型は全体のうち、29.2%が正答で、中高型は全体のうち、36.3%が正答である。

図1を見ると、3拍語と4拍語の正答率が類似していることがわかる。まず、頭高型と平板型の正答率は3拍語が高く、中高型の語は4拍語が高い。拍数別にみると、3拍語では平板型が36.5%と高いが、次の中高型の36.3%とあまり差はない。頭高型が29.2%と一番低い。4拍語の場合も正答数に差はあるが、3拍語と同じで中高型が40%と一番高く、平板型23%と頭高型が21.3%で共に低い。3拍語と4拍語ともに頭高型の正答率が低い。殊に正答率が低いのは4拍語の頭高型の場合である。李・鮎沢・西沼（1997）でも日本人大学生で無アクセント地域出身者のアクセント型別正答率を見ると、頭高型の正答率に大きな差があり、韓国語ソウル方言話者からも同じ傾向が見られた。

## 4.2 発話パターン

図2は被験者のアクセントを聴取した結果、各単語がどの型で発話されているかを、3拍語と4拍語を発話した際の発話パターンを示したものである。

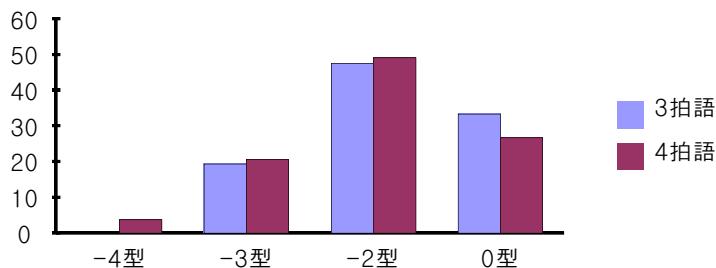


図2 3拍語と4拍語の発話パターン

図2から3拍語と4拍語の生成パターンが類似していることがわかる。大邱方言話者は3拍語と4拍語ともに後ろから2拍目に核がある-2型が50%近く、最も高い。0型がその次に30%前後で続く。一方、頭高型の-4型の生起率は非常に低い。つまり、大邱方言話者は語末から2拍目に下降がある-2型で生成する傾向が著しい。例えば、「じだい～(時代)」を[じだ'い] (6/10<sup>8</sup>) \*、「じゅうたく～(住宅)」を[じゅうた'く] (8/10) \*、「てんとう～(店頭)」を[てんと'う] (7/10) \*のように発話している。正答率と生成パターンの結果と比較してみると、大邱方言話者は語中にアクセント核がある型の生成が優勢であることが予測される。

### 4.3 拍数別及びアクセント型別分析

#### 4.3.1 3拍語

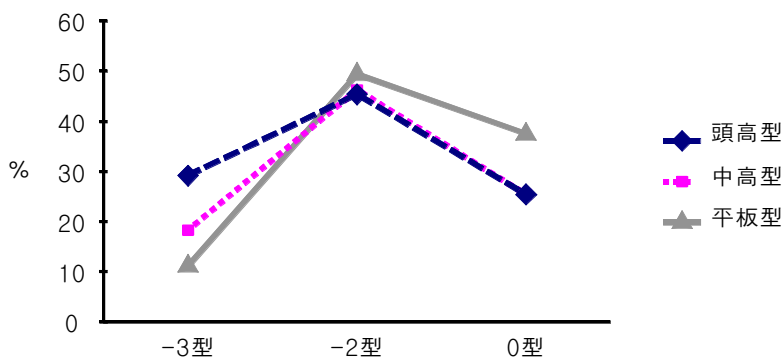


図3 3拍語の生成パターン

図3は3拍語の発話で聴取された生成パターンをアクセント型別に示したものである。図3からわかるように、3拍語の発話はいずれのアクセント型においても類似した傾向が見出された。すなわち、いずれのアクセント型も-2型が一番多い。例えば、頭高型の「技術」を[ぎじゅ'つ] \*、「手配」を[ては'い] \*などのように発話し、中高型は「一人」を[ひと'り]、「玉子」を[たま'ご]のように正答で発話し、平板型の「次第」を[しだ'い] \*、「不明」を[ふめ'い] \*のように発話している。-2型の次に多い生成パターンはアクセント型別に差があり、頭高型の場合は-3型が多くなり、中高型や平板型の場合は0型の発話が多くなっている。

8) (6/10) とは該当パターンの生起度を示したもので、斜線より左は該当パターンの生起度、右は該当語の発話回数(すべて10回)で、全体10のうち、6を該当パターンで生成していることを示す。以下、同様。

### 4.3.2 4拍語

図4は慶尚道方言話者が4拍語を発話した際の発話パターンをアクセント型別に示したものである。

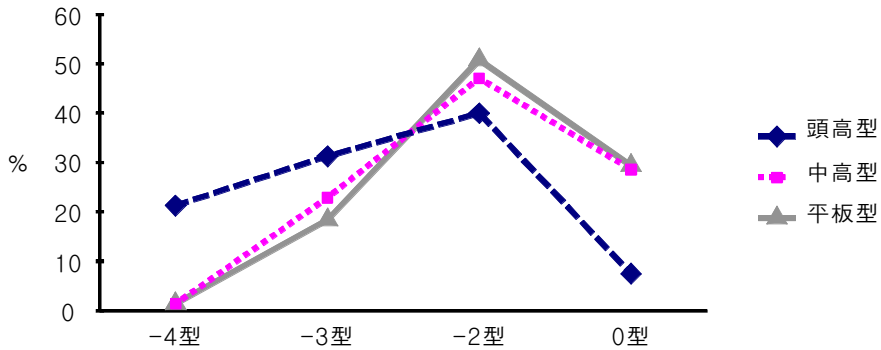


図4 4拍語のアクセント型別生成パターン

いずれのアクセント型も-2型で発話する傾向が著しい。-2型の生起率は平板型の語の場合が一番高く、その次が中高型の語、一番低いのが頭高型の場合である。-2型は正答と誤用を含めて多いが、その例をみると、例えば、「海外」を [かいが'い] \*、「生命」を [せいめ'い] \*、「連絡」を [れんら'く] \*のように発話する。一方、頭高型の語においては-3型の発話が20%と他のアクセント型より高いが、例えば、「か'んこく (韓国)」を [かん'こく] (5/10) \*、「ぶ'んがく (文学)」を [ぶん'がく] (5/10) \*のように生成する。つまり日本語の-4型 (頭高型) が-3型になったもので、音節をアクセント付与の単位として発話したためと考えられる。この結果から、日本語のアクセント型とはあまり関係なく類似した傾向がみられることが明らかになった。

以下では学習者の日本語アクセントの生成にどのような要因が関わっているかを探る。

## 4.4 音節構造別の分析

上で、日本語のアクセントは生成にあまり関与しないことがわかった。ここでは音節言語の大邱方言を母語とするものは日本語のアクセントの生成において、音節がどのように関与するかを探りたい。

### 4.4.1 3拍語

#### 4.4.1.1 音節構造が「重音節+軽音節」の場合

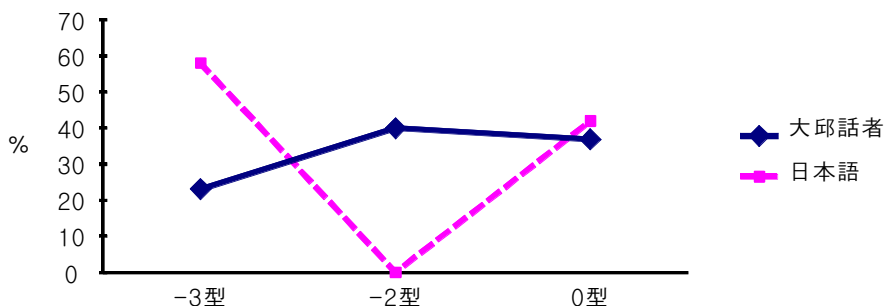


図5 音節構造が「重音節+軽音節」の語の発話パターン

図5は3拍語の中で、音節構造が「重音節+軽音節」の語の発話の結果、現れた生成パターンを示したものである。例えば、「きょうと（京都）、たいき（大気）、でんち（電池）、かいしゃ（会社）」などがある。

図5から-2型が一番高く、その次に0型が多いことがわかる。しかし、-2型と0型の差が少ないことから、ゆれがあることと思われる。例えば、頭高型の「そ'うき（操作）」を[そ'う'き] (4/10) \*、「で'んち（電池）」を[でん'ち] (6/10) \*、「てんき（天気）」を[てん'き] (6/10) \*などで-2型が現れるが、日本語の-3型のアクセントが1拍後ろにずれたパターンである。また、いずれの語においても0型が30%を越えている。そして、同じ重音節でも特殊拍の種類によって-2型の生起数に差があった。つまり、撥音の場合は6以上になるが、長音や二重母音は4か5程度である。また、平板型の「参加」、「消費」、「相手」、「電話」などは0型の生成が60%以上を占め、-2型は30%以下である。すなわち、調査語が頭高型の場合は-2型が多いが、調査語が平板型の場合は0型が増えている。これは日本語のアクセントが習得されている可能性もあるが、語末までを高くする母語の影響による可能性もあると考えられる。このような音節構造の例を韓国語から見ると、以下のようである（梅田1961, 孫2006）。

- (1) a. 高低 ●○ 망치(manŋʃi)とんかち、멀미(məlmi)乗り物酔い、상추(saŋʃhu)チシャ  
 b. 高高 ●● 번개(pənke)稲妻、봉사(poŋsa)ボランティア など  
 c. 低高 ○● 단추(danʃu)ボタン、만두(mandu)餃子、막내(manne)末っ子 など

「重音節+軽音節」構造の2音節語は大きく1音節の後に核があるか、語末まで高く続く二つの区別がある。このような母語アクセントの影響で、日本語の生成においても2音節のこの音節構造では高低 (●○) か低高 (○●) の生成パターンが多い。

4.4.1.2 音節構造が「軽音節+重音節」の場合

図6は音節構造が「軽音節+重音節」の語の発話結果を示したものである。例えば、「しゅゆう（所有）、しだい（次第）、しそう（思想）、ひはん（批判）」などがある。図6から生成パターンとして0型が一番多く、その次に-2型が多いことがわかる。

0型が多いのは日本語のアクセントに0型が多いためでもあるが、生成パターンでは誤用も多く含まれる。0型の誤用は例えば、[にほん] \*、[さよう] \*、[きかん] \*、

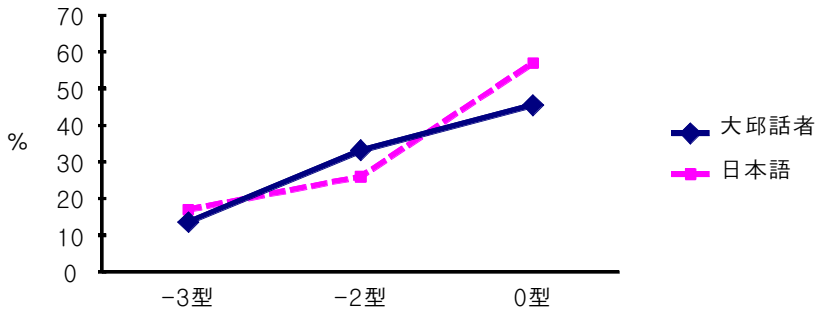


図6 音節構造が「軽音節+重音節」の発話

[しけん] \*などで多く、-2型の誤用は[しだ'い] \*、[ふめ'い] \*、[とけ'い] \*、[ちほ'う]などで優勢である。この結果から、語末に撥音がある場合は0型が多いが、語末に二重母音がくる場合は0型と-2型の両方が見られ、発話にゆれがある。同じ音節構造を有する大邱方言の場合を見ると、以下のようである（梅田1967、孫2006）。

- (2) a. 低高○● 가을(kaur)秋、가죽(kafuk)皮、개울(keur)小川、구멍(kumŋ)穴 など
- b. 高低●○ 거북(kɔbuk)亀、거울(kour)鏡、거품(kɔphum)泡、겨울(kjou)冬など
- c. 高高●● 고름(korum)膿、구경(kukjŋ)見物 내(:)승(ne:sun)猫かぶり など

発話のゆれは特殊拍の自立性（窪園1999）によって生成パターンに差異が生じることが考えられる。すなわち、二重母音や長音のように語末にくる特殊拍のうち、自立性があると学習者が認識している場合はその前にアクセント核がおかれ、-2型になる傾向がある。そして、学習者は二重母音を単母音と同じように扱っているのである。

4.4.1.3 音節構造が軽音節+軽音節+軽音節の場合

図7は音節構造が「軽音節+軽音節+軽音節」の語の生成パターンを示したものである。

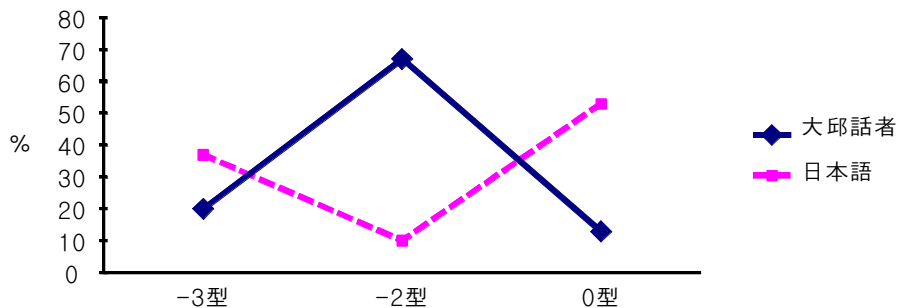


図7 音節構造が「軽音節+軽音節+軽音節」の発話

この音節構造は例えば、「かたく（家宅）、なごや（名古屋）、きおく（記憶）、ふそく（不足）、がくぶ（学部）」などのように3拍とも自立拍で構成されている場合である。日本語のパターンとは逆の傾向がみられる。つまり、日本語の場合は-2型の生起率は非常に低く、0型が53%であるのに対し、大邱方言話者の発話では0型が2割にも満たない低い生起率を占めているのに対し、-2型の生起率は高く、67%を占める。大邱方言話者は3拍でかつ自立拍の語は-2型で発話していることである。例えば、[たま'ご]、[なご'や] \*、[じこ'く] \*、[かが'く] \*、[きお'く] \*などを-2型で発話している。これは日本語とはまったく異なったパターンで生成していることが明らかである。しかし、「ゆくえ」の場合は、[ゆくえ]、と [ゆくえ~] のように0型と-2型が半数ずつで、発話にゆれが見られた。語末に母音がある場合は0型も多くなり、単母音の場合と子音を伴った場合とでは差があることと推測される。つまり、語末の構造が—CVと—Vとでは発話パターンに違いがある。つまり、アクセント型と音節構造が同じ場合でも語音構造によって違いが見られることになる。韓国語で同様の音節構造の例を見ると、以下のようである。

- (3) a. 低高低 ○●○ 소나기(sonaki)夕立, 미 짜루(mijaru)ほうき, 아저씨(ajjosi)おじさん  
 b. 高高低 ●●○ 사마귀(sa:makwi)かまきり, 사투리(sa:turi)訛り

3音節で重音節を含まない場合は、語中を高くする(3a)や語中までを高くする(3b)のアクセント型が優勢である。

#### 4.4.2 4拍語

##### 4.4.2.1 音節構造が「重音節+軽音節+軽音節」の場合

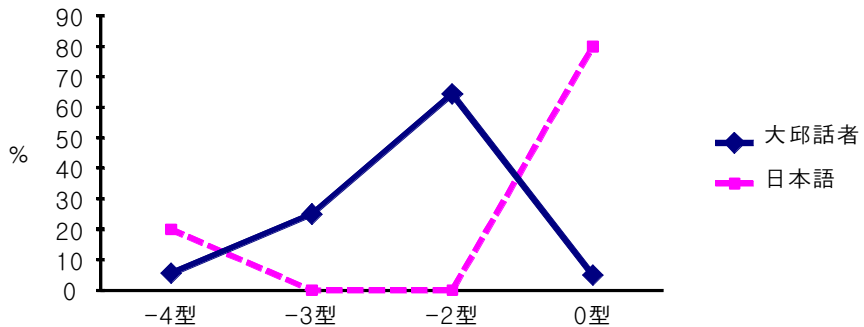


図8 音節構造が「重音節+軽音節+軽音節」の語の生成パターン

図8には音節構造が「重音節+軽音節+軽音節」の語の発話結果で現れた生成パターンを示した。この構造は例えば、「れんらく(連絡)」、「かいはつ(開発)」などのように第2拍が特殊拍の場合で、音節で数えると3音節になる。この音節構造には頭高型が20%、平板型が80%ある。大邱方言話者はこの音節構造の語を-2型で生成する傾向が高い。ところが、正答の0型は極めて低い。例えば、[れんら'く] (8/10) \*、[かいは'つ] (9/10) \* のように発話するパターンで、これは大邱方言アクセントが語末から2番目に核がくる特徴によるものと思われる。そして、0型が少ないのは語頭音節が重音節で、音節内での下降が困難なためであろう(早田1999)。特殊拍を含む語の誤りが多いことは指摘されている(鮎沢1995)。韓国語の場合、「重音節+軽音節+軽音節」構造の語はほとんど低高低(○●○)で実現される。

- (4) 低高高(○●○) : 변대기(ponteki)さなぎ、병어리(ponɔri)つんぼ、봉오리(ponori)つぼみ、덩어리(tɔŋɔri)かたまり、작대기(ʃakteki)長い棒、잠자리(ʃamʃari)とんぼ など

このような傾向は語頭に重音節がある場合だけでなく、語頭が軽音節の場合、例えば、後述する「軽+軽+軽」の構造や「軽+軽+軽+軽」の構造でも同様のことがみられる。言い換えると、重音節の位置がアクセント付与に関わり、重音節が語頭にある場合、大邱方言話者はそこにアクセント核をおかない傾向が顕著である。このような傾向が3音節数以上の場合にも同様かどうかは今後調べる必要があると思われる。

#### 4.4.2.2 音節構造が「軽音節+軽音節+重音節」の場合

図9は4拍語で音節構造が「軽音節+軽音節+重音節」の語の発話結果を示したも

のである。この音節構造は4拍目が特殊拍の場合で、音節で数えると3音節になる。例えば、「がくもん（学問）」、「げきじょう（劇場）」などである。

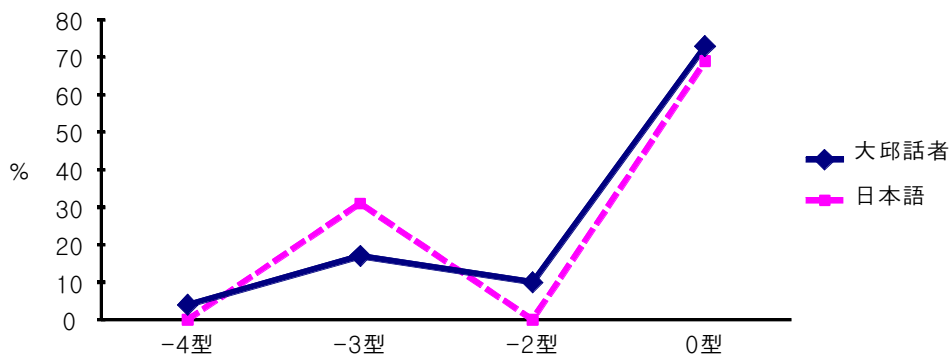


図9 音節構造が「軽音節+軽音節+重音節」の語の生成パターン

この音節構造の語には中高型の語が33%、平板型が69%ある。図9から大邱方言話者は0型の発話が最も多いことがわかる。方言話者は語末の重音節を高く平らにする傾向がある。これは語中の重音節にアクセントがおかれる母語の特徴と3音節の語の語末を高くする規則が共に影響されたと思われる。LLHの音節構造の韓国語の例を見ると、語末を高くする(5a)、(5b)のようなアクセント型と語中を高くする(あるいは語末の重音節の前を高くする)(5c)と(5d)のようなアクセント型が見られるが、(5a)と(5b)が優勢である(孫2006)。

- (5) a. 低高高○●●마지막(mafimak)最後、꾸지람(kufiram)叱責、오르막(orumak)登り坂 など  
 b. 低低高○○●부스럼(pusurum)できもの、부뚜막(putumak)かまど、내리막(nerimak)下り坂など  
 c. 低高低○●○도마뱀(tomabem)とかげ など  
 d. 高高低●●○고드름(ko:turum)つらら など

#### 4.4.2.3 音節構造が「重音節+重音節」の場合

図10は音節構造が「重音節+重音節」の語の発話結果を示したものである。この音節構造には2拍と4拍に特殊拍がある場合で、音節で数えると2音節になる。例えば、「けんこう（健康）」、「せいさん（生産）」、「しょうすう（少数）」などで、頭高型13%、中高型8%、平板型が78%である。

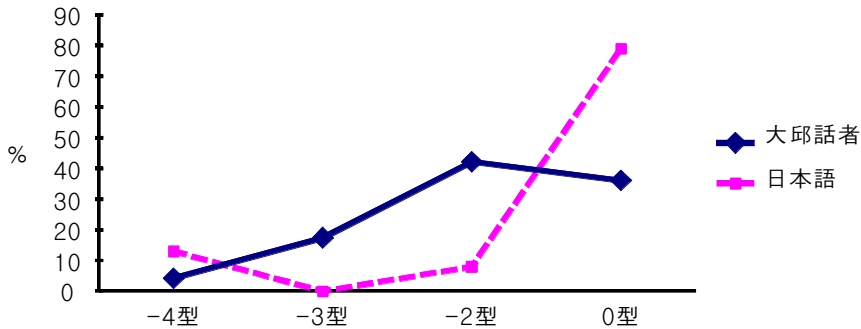


図10 「重音節+重音節」の語の生成パターン

図10をみると、大邱方言話者の発話は-2型が42%と一番高く、0型が37%で次いでいる。しかし、-4型は極めて低い。4拍目に特殊拍があるにも関わらず-2型（音節内での下降）が生じたのは、「しょうすう、せいめい、けんこう」などのように長母音や二重母音がかかる場合である。これらは大邱方言で長音を持つ音節内で下降が生じる母語の影響によるものと思われる（早田1999, 関1989a, 1990）。助川・佐藤（1995）で「音声の自然性の維持にいまなお用いられていることと/ne:/という音韻系列が、韓国語ではたまたま意味で会話に頻出するものであることから、その方面の影響が示唆される」と述べたことを裏付ける。そして、大邱方言は長音によって、または、長音や二重母音が特殊拍において長さの単位として自立性があるため（窪園1999）、発話にゆれが生じたことと推測される。この結果は他の実験でソウル方言話者にはあまり見られなかった大邱方言話者の特有の発話パターンである（鄭2001）。HHの音節構造を持つ韓国語の例を（6）に挙げた（梅田1961, 孫2006）。語末が高い(6a)と(6b)が優勢で、(6c)の例は少ない。

- (6) a. 低高 ○ ● 당근(taŋkʌn)にんじん, 둥산(tonʌn)丘, 달걀(tarkjaŋ)玉子, 발톱(paltop)足の爪, 손톱(sontop)指の爪 など
- b. 高高 ●● 생각(se:ŋgak)思い, 쓸개(sulke)胆嚢, 형질(hoŋkʌp)布切れ など
- c. 高低 ●○ 덩굴(toŋkur)蔓, 얼음(eŋrum)氷 など

特殊拍別に生成パターンに差があるものの、第1音節と第2音節が重音節の場合は第2音節を高くするパターンが優勢である。ところが、韓国語の場合、重音節+重音節で語末が二重母音 (i)の例は見られない。それは、韓国語の連音の発音規則があり、「이(i)」の前には重音節（尾子音を含む）がおかれやすいためではないだろうか。これについては今後調べる必要があると思われる。

## 4.4.2.4 音節構造が「軽音節+軽音節+軽音節+軽音節」の場合

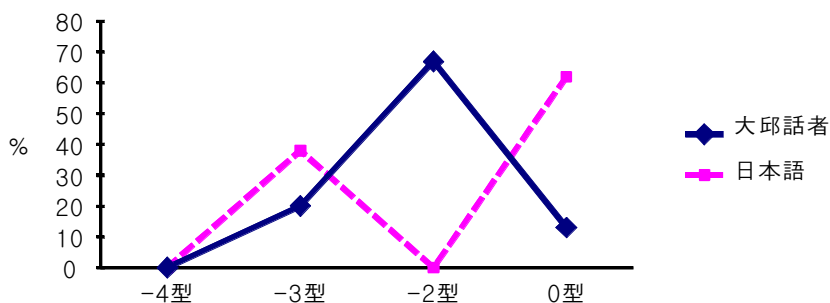


図11 「軽音節+軽音節+軽音節+軽音節」の語の生成パターン

図11はこの音節構造の語の発話結果を示したものである。この音節構造は語中に特殊拍がない場合で、例えば、「やまなか（山中）」、「とくべつ（特別）」、「こくりつ（国立）」などがある。この音節構造には頭高型8%、平板型が92%ある。

図11から大邱方言話者は特殊拍を含まない音節構造においては-2型が70%と最も多いことがわかる。日本語の場合92%を占める0型は20%にも満たない低い生起率を占める。-2型が多いのは大邱方言話者の最も優勢な発話パターンであるためであろう（鮎沢1995、李香蘭1999、大西1991、李・鮎沢・西沼1995）。そして、大邱方言で4拍語は語彙的な偏りが激しく、[低低高低]型か「低高高低」型が多いが（大江1976、早田1999、孫2006）、語例からは(9)のように、低低高低(○○●○)が最も優勢であった。

- (9) 低低高低○○●○ 두드리기(tuturki)じんましん、미꾸라지(mikuraŋi)ドジョウ、  
수수끼끼(susukeki)なぞなぞ、아주머니(aŋumɔni)おばさん など

一方、0型は他の音節構造より極めて低くなっており、自立語が続く音節構造では語末から2音目にアクセントが置かれる母語の影響（大江1976、早田1999）が顕著であることが明らかになった。

## 5. まとめと今後の課題

本稿では、大邱方言話者の3拍と4拍語の発話実験から発話でのパターンの傾向を調べた。その結果、アクセント生成には音節構造及び重音節の位置が関与していることが明

らかになった。その結果をまとめると以下のものである。

- (1) 発話では後ろから2拍目にアクセント核がくる-2型が最も優勢で、それは語末から2モーラ目にアクセントがある（早田1999）母語の干渉によるものであることがわかった。なお、-2型は韓国人学習者に多く見られる傾向である先行研究（鮎沢他1995、李・鮎沢・西沼1995a,1995b、李香蘭1999）の結果を裏付けた。
- (2) 発話は日本語の音節構造に影響され、特殊拍がある音節の場合、特殊拍の前か後ろに下降がある傾向が顕著であった。ところが、大邱方言話者の場合、音節内での下降も多く見られた。これは長音の場合、他の方言話者とは有意差があった助川・佐藤（1994）の結果を裏付ける。
- (3) 特殊拍を含む音節へのアクセント核付与は、撥音、長音、二重母音といった特殊拍の種類によって、異なった水準で影響を与えることが見出された。二重母音の場合はほとんど自立拍と類似し、二重母音の前にアクセント核がおかれる傾向があるが、ただし、重音節が第1音節（語頭）にあるHL構造の場合は他の音節構造とは違って、語頭にアクセント核がおかれにくい母語の影響で、二重母音の後にアクセント核がおかれた。本稿では促音の例が非常に少なく、分析までには至らななかった。このように音節内で下降があるのはモーラの性質を有し、アクセントによる意味の違いを持つ母言の影響（関1989a、1990）によるものであろう。
- (4) アクセント核付与に音節構造と重音節の位置が関与していること、つまり、語末にある重音節にアクセントがおかれやすく、語頭の重音節にはアクセント核がおかれにくいことが明らかになった。すなわち、語末にある重音節には語末まで高くなる傾向があるが、語頭にある重音節にはアクセント核がおかれず、後続する軽音節にアクセント核がおかれるか、または後続する重音節まで平板化する。

大邱方言話者の生成で生起率の高い-2型と0型を音節の種類と位置の関わりからまとめると、以下のようになる。0型の生起の順：語末の撥音＞語末の長音＞語末の二重母音＞軽音節-2型の生起の順：語末が軽音節＞語末の二重母音＞語末の長音＞語末の撥音つまり、0型の生起率の順番と-2型の生起の順番は逆になる。先行研究では学習者のアクセント生成で重音節によって生成パターンに差異があることが報告されているが（助川1999）、その詳細はあまり述べられていなかった。本稿で大邱方言話者の場合、重音節にアクセント核が付与され、かつ重音節の位置もアクセント付与に関与することを明らかにしたのは注目するに値する。そして、学習者の日本語アクセントの生成

において、特殊拍の種類によって生成パターンに差異があるという新しい知見が得られた。

本稿では調査語にばらつきがあり、音節構造別分析において特殊拍の種類別にばらつきがあった。特に促音の例は非常に少ない。今後は同数の調査語を選定するよう注意を払う必要があると思われる。本稿では学習者のアクセントの下降の位置だけを検討したが、今後上昇のパターンについても調べる必要があると思われる。そして、特殊拍について詳しい調査が必要であると考えられるが、今後の課題にしたい。

## 【参考文献】

- 鮎沢教子 (1995) 「日本語学習者による日本語アクセントの聞き取り—韓国語・英語・フランス語・北京語話者の場合—」『国立国語研究所研究発表資料集』
- 鮎沢教子・西沼行博・李明姫・荒井雅子・小高京子・法貴則子 (1995) 「東京語アクセント聴取実験結果の分析—10言語グループの結果—」『国立国語研究所研究発表資料集』 pp.263-270
- 李明姫・鮎沢教子・西沼行博 (1995a) 「外国人日本語学習者による東京語アクセントの聞き取り—フランス人、中国人、韓国人データの考察—」『国立国語研究所研究発表資料集』 pp.231-243
- \_\_\_\_\_ (1995b) 「韓国人学習者の東京語アクセントの知覚—釜山地方の場合—」『日語日文学4』大幹日語日文学会、pp.87-98
- 李明姫・鮎沢孝子・西沼行博 (1997) 「ソウル出身日本語学習者の東京語アクセントの知覚」『日本語学報』第38号、87-98
- 上野善道 (1990) 「日本語のアクセント」『講座日本語と日本語教育2日本語の音声・音韻(上) 杉藤美代子編』明治書院、pp.178-205
- 大江孝男 (1976) 「大邱方言におけるアクセントの型と長母音」『音韻研究』69、pp.
- 大西晴彦 (1991) 「韓国人の日本語アクセントについて」『国際学友会日本語学校紀要』15菅野裕臣 (1972) 「朝鮮語慶尚道方言アクセント体系の諸問題」『アジア・アフリカ語学院紀要』 pp.83-96
- 窪園晴夫 (1995) 『日英語対象研究シリーズ (3) 語形成と音韻構造』くろしお出版
- \_\_\_\_\_ (1998) 『日英語比較選書10 音韻構造とアクセント』研究者出版
- \_\_\_\_\_ (1999) 『現代言語学入門2 日本語の音声』岩波書店
- 坂井 裕 (1992) 『音声 アクセント クリニック』凡人社

- 佐藤ゆみ子 (1996) 「日本語の音節末鼻音 (撥音) のモーラ性」 『音声学会会報』 第212号、pp.67-75
- 鄭然榮 (1975) 「慶尚道方言声調の歴史的発達」 『朝鮮学報』 74, pp.147-154、朝鮮学会
- 鄭樹漢 (2001) 「日本語学習者の日本語アクセント-ソウル方言話者と慶尚道方言話者の語アクセントと複合語アクセント-」 『日本語研究センター報告』 9、大阪樟蔭女子大学、pp.29-38
- 杉藤美代子 (1990) 「音節か拍か」 『講座日本語と日本語教育2日本語の音声・音韻 (上) 杉藤美代子編』 明治書院、pp.154-177
- 助川泰彦・佐藤慈 (1994) 「韓国人学習者の日本語アクセント知覚における音節構造の影響」 『東北大学留学生センター紀要』 第2号、pp.27-32
- 助川泰彦 (1999) 「ブラジル人日本語学習者の2モーラ語と3モーラ語のピッチ実現」 『音声研究』 第3巻第3号、pp.13-25
- 孫在賢 (2006) 「アクセント調査項目リスト-単純名詞-」 『アジア・アフリカの言語と言語学』 pp.89-128
- 戸田貴子 (2001) 「日本語音声習得研究の展望」 『第二言語としての日本語の習得研究』 4号、第二言語習得研究会、pp.150-168
- 服部四郎 (1968) 「朝鮮語のアクセント・モーラ・音節」 『ことばの宇宙』 3巻5号、pp.84-90
- 福井玲 (2001) 「韓国語のアクセント」 『音声研究』 第5巻第1号、日本音声学会、pp.11-25
- 皆川泰代・前川喜久雄・桐谷滋 (2002) 「日本語学習者の長/短母音の同定におけるピッチ型と音節位置の効果」 『音声研究』 第6巻第2号、pp.39-53
- 関光準 (1989a) 「韓国語アクセントの音響的特徴について—大邱方言における一音節名詞の基本周波数曲線と持続時間—」 『朝鮮語教育研究』 3号、pp.71-89
- \_\_\_\_\_ (1989b) 「韓国語慶尚道方言の一音節名詞におけるアクセント型の音響的分析と合成音声による知覚実験—日本語との対象研究のための基礎的資料として」 『朝鮮語教育研究』 4号、pp.93-106
- \_\_\_\_\_ (1990) 「日本語と朝鮮語のアクセントとイントネーション」 『講座日本語と日本語教育3 日本語の音声・音韻 (下)』 pp.303-329
- 早田輝洋 (1999) 『音調のタイポロジー』 大修館書店
- 이호영 (1993) 현대 한국어의 악센트에 관한 연구. [언어학] 15. 한국언어학회
- 李香蘭 (1999) 한국인 일본어 학습자의 일본어 악센트 학습효과 [日本文化学報] 7. 韓国日本文化学会、pp.101-121

## 要 旨

本稿では日本語のような弁別のアクセントを持つ韓国語の大邱方言話者の日本語アクセントの生成の実体を調べ、生成における傾向と母語の影響を明らかにした。次に、学習者の日本語アクセント生成は日本語の音節構造にも影響され、特殊拍がある音節では音節内の下降が生じにくく、特殊拍の前か後にアクセント核がずれる傾向が顕著であった。言い換えると、大邱方言話者は音節の単位でアクセントを生成する。また、アクセントがおかれやすい重音節の位置によって、語末に重音節があるとその音節末まで高くなるが、語頭に重音節がある場合は、そこにアクセントはおかれず、重音節に後続する軽音節にアクセントがおかれた。これは、語末にアクセントがおかれやすい母語の影響によるもので、つまり、大邱方言の場合、2音節から4音節までの語は語末から2音節目か語末まで高いアクセント型が優勢であるためであろう。一方、音節内での下降も少し見られたが、それは音節内で下降や上昇の型を持つ母語の影響によるものである。音節内での下降は特に二重母音と長音の場合に多く現れた。特に、二重母音の場合に自立拍と同様の傾向がみられた。このような特殊拍の自立度は日本語のアクセントでも同様の結果が見られ、今後、包括的な研究として発展していきたい。

キーワード：大邱方言話者、日本語アクセント、アクセントの生成、音節構造、特殊拍、重音節の位置、母語の干渉

투 고 : 2010. 2. 28  
1차 심사 : 2010. 3. 13  
2차 심사 : 2010. 3. 27